

# 女子大学および女子短期大学における 情報活用能力の育成に向けて

小島 浩司・白井 靖敏

## Program for Information Literacy at Women's Colleges

Hiroshi KOJIMA and Yasutoshi SHIRAI

### Abstract

Based on A simple questionnaire survey, we did various kinds of considerations of a women's four-year and junior college. We concluded that almost all students are going to have their personal computer, their own word processor or personal facsimile in the near future, and they will also master how to handle those machines in order to process a great deal of information. Thus, we think it is necessary to improve drastically our curricula to teach them more information literacy as well as basic operation methods.

### はじめに

高度情報化時代と言われて久しいが、ここ数年、特に情報化の進展がめざましい。今後ますます加速することなど、容易に想像できる。インターネットと言う言葉がTVコマーシャルにも登場するほどの勢いでもある。その意味など知らなくても言葉だけが先行することはよくあるが、実際人々は、より便利に、より速く情報等の処理ができるよう絶え間ない努力を重ねてきたのである。例えば、FAXは電話の数倍の情報量を伝達できる。FAXなど家庭に必要がないと思っている人でも、一度その便利さに気づくと手放せなくなると言う。電話による情報の伝達には限界があり、地図などの図形を言葉で説明することはできない。また、手紙では配達等に1日以上は必要で、遠距離になれば、それだけ時間もかかる。FAXもまた、一度紙に書いた、あるいは印刷したものを使わなければならないが、パソコン通信などの通信技術を使えば電子情報としてそのまま伝送できる。特に、バイナリデータの伝送はFAXでは不可能である。“便利さ”は止まることを知らない。

私たちは、昔から基本的なリテラシーとして、“読み書きソロバン”とよく言ってきた。これらの基本技能はしっかりと習わなければ修得できない。読むことができ、書くことができ、話すことができ、そして、計算することができることは、生活する上での基本であることは今も変わらない。しかし、これらの技能に加えて、情報リテラシーを、新しいリテラシーと位置づける社会的な要求が強くなりつつある。コンピュータ等の機器の基本操作ができないと、電子化された情報の読み書き、あるいは加工や編集ができなくなることになるからである。

これからの高度情報化社会に対応する情報教育を考え、本学の情報関連科目の内容やカリキュラム等の改善に努力していく必要がある。今回、本学の学生（家政学部1年，2年および短期大学部生活学科生活情報専攻1年）に情報リテラシー等の基本的な質問に加え、本学の情報教育に対する率直な意見等を聞くための簡単なアンケート調査を行った。アンケートの有効回答数は合計328名であり、回答のクロス集計等の分析を行った結果をもとにこれからの情報教育について考察する。

## アンケートの結果

### 1. 情報関連機器

今回、調査対象とした学生が現在持っている機器では、CDプレーヤー、ステレオ（ラジオを含む）、ポケットベルが上位3位を占め、現代の女子学生の定番となっている（図1）。専用ワープロとパソコンとを合わせると、3位にくい込み、ポケットベルを上回る。この結果は、予想していた以上に電子情報に対して積極的になってきていることを表している。そして、これから持ちたい機器のトップがパソコン、続いてFAX、専用ワープロとなっていて、この3つを合わせると延べ300名にも及ぶ（図2）。現在持っている学生とこれから持ちたいと思っている学生とを合わせると、近い将来、ほとんどの学生がパソコンや専用ワープロなどの情報機器を1台以上持つことになるものと思われる。

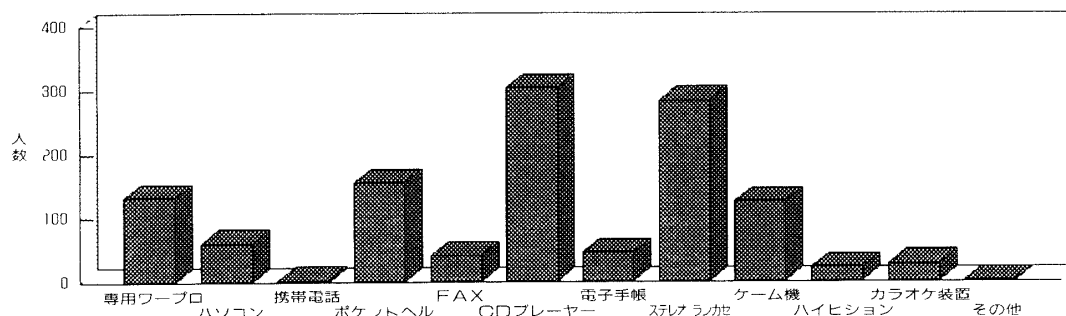


図1 現在持っている情報関連機器

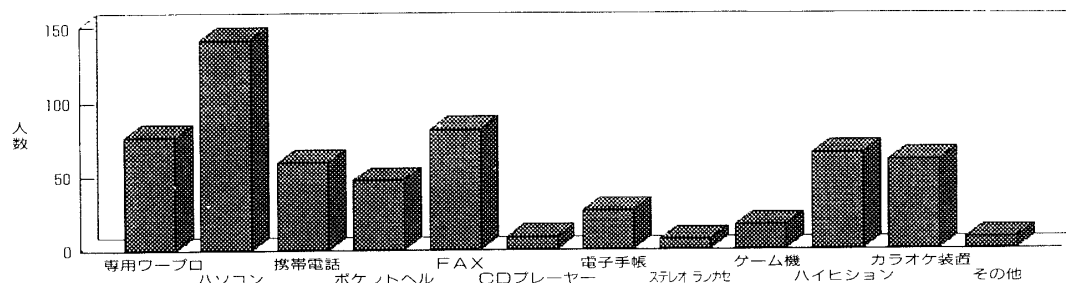


図2 これから持ちたい情報関連機器

### 2. 将来の仕事と身に付けたい能力や資格

将来、就くであろう仕事のために、学生時代に最も身に付けておきたい能力を自由記述の形式で質問した結果、ワープロおよびパソコンに関する能力と答えた学生が、133名あり、多数を占め、2位は英語（23名）となっている。また、大学で必ず取得したい資格として、ワープロ

検定が80名で1位，2位が栄養士（管理栄養士を含む）で41名が入る，栄養士等に関しては，調査対象とした食物栄養学科の学生がほとんどで，調査標本に偏りがあって一般化できない  
3位には教員免許，ついで，4位に英語検定，といった順になっている 5位以降は10名程度でバラツキも大きい

情報関連で見ると，検定や資格を取得しようとするより，必ず，情報機器等の操作や情報処理能力を身に付けておきたいと考えていることが分かる また資格取得の必要性を感じないと考えている学生は少なく，ほとんどが将来の仕事に必要な資格を1つ以上取得したいと思っている 希望職種別に集計すると，教育系では教員免許，技術系では栄養士等，といわゆるこれらの資格がないと，仕事をする事ができない，職務独占の資格が多いのは当然である．情報処理やワープロなどの検定は技術レベルに対する認定的な性格をもっているのので，これらの技

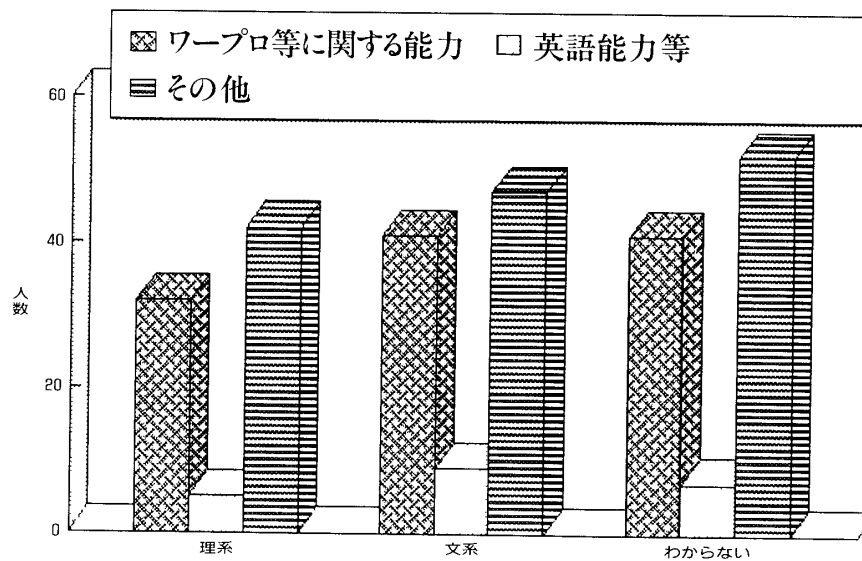


図3-1 身に付けたい能力・適性別

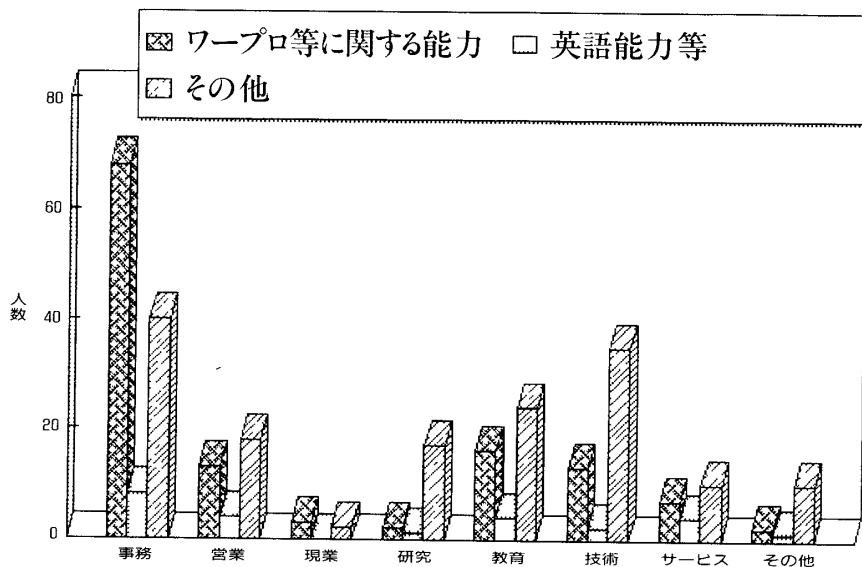


図3-2 身に付けたい能力・希望職種別

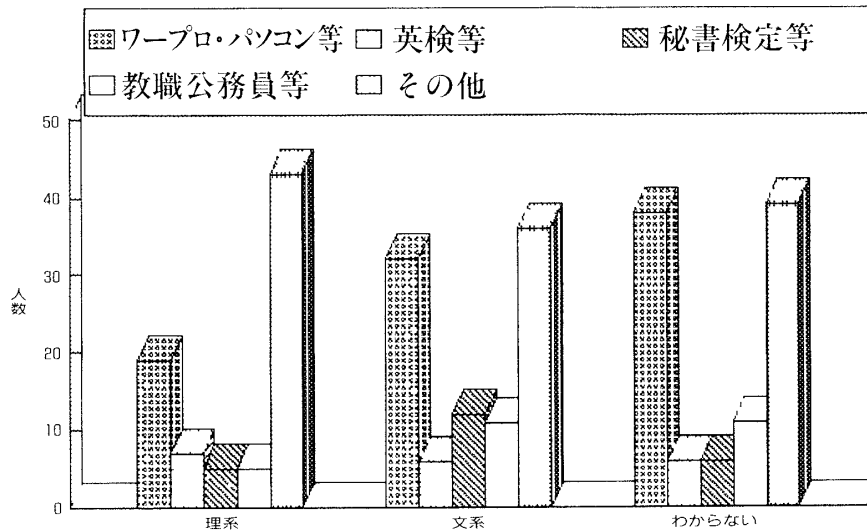


図4-1 取得したい資格・適性別

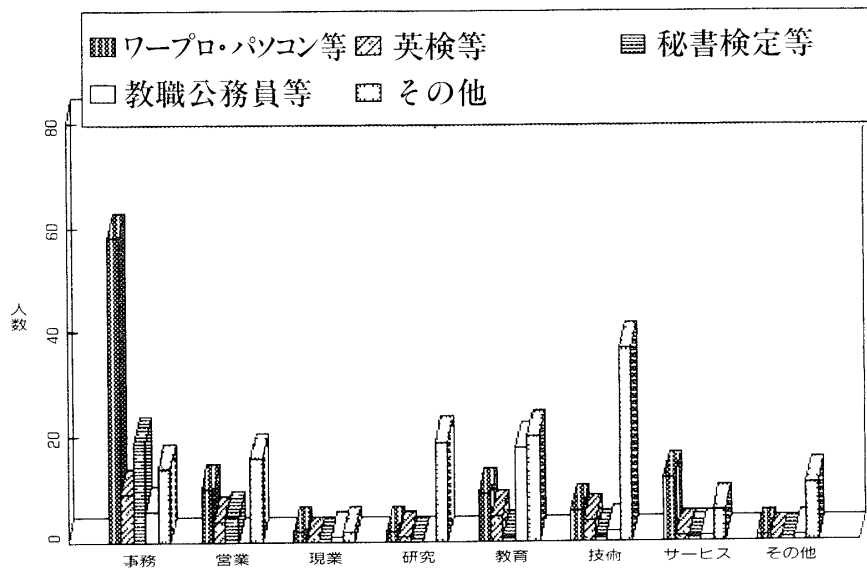


図4-2 取得したい資格・希望職種別

術を身に付けることは必要でも、絶対に取得しなければならない種類のものでもないことも、調査結果からうかがえる

一方、観点を变えて、適性(理系向き、文系向き、わからない 図3)、あるいは希望職種(事務、営業、研究、教育、技術など 図4)についてのクロス分析を行った 身に付けたい能力や資格に関しては、有意な差は認められなかった ( $\chi^2$ 検定 有意水準1%)

### 3. 現在選択している情報関連科目

現在、学生が受講している情報関連について、その満足度を聞いた(図5、6) 各科目別に「満足」から「不満」までを5段階の評価で区分した 結果は、調査対象の学生に限ったもので、一般化はできないが、理論中心の講義科目より、実習中心の演習科目に満足度が高く、

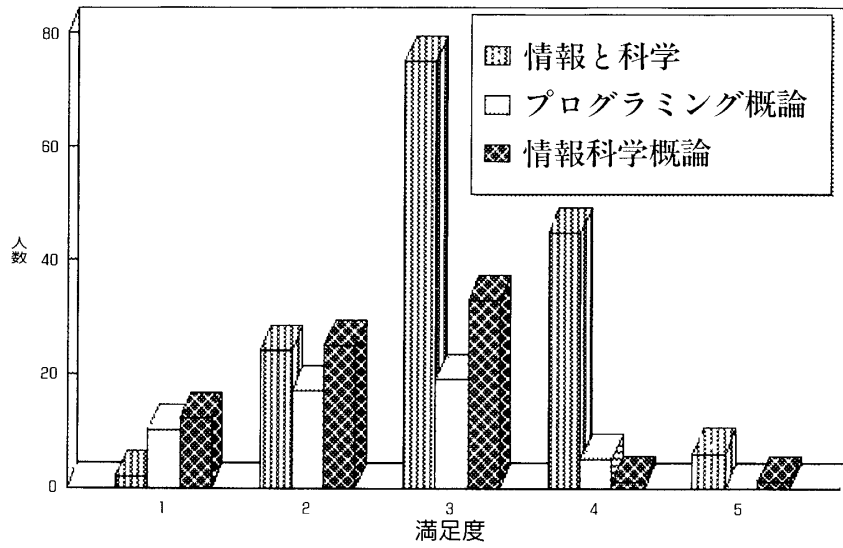


図5 科目満足度(講義科目)

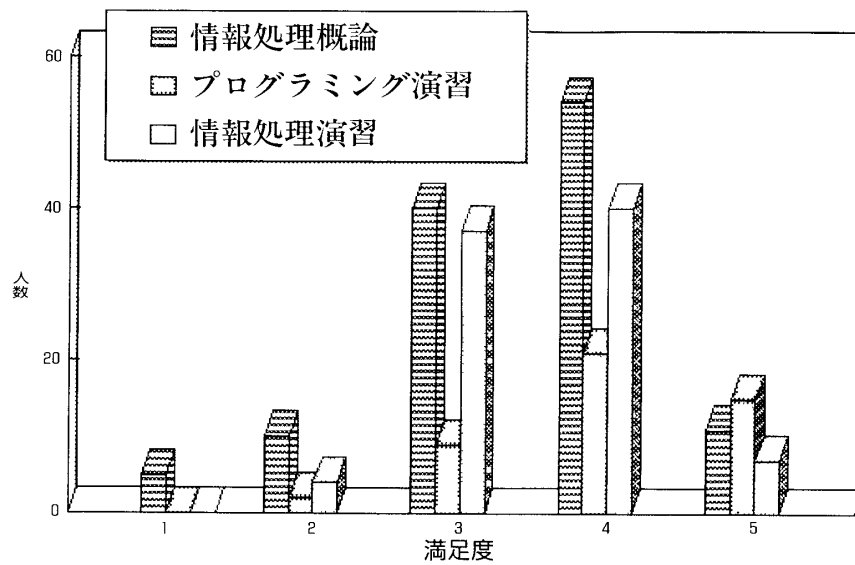


図6 科目満足度(演習科目)

特に、初めて情報関連科目の学習をする学生にとって、実際の機器に触れることによって実感できたのであろう。初心者にとって、情報は目に見える概念ではないので、具体的な対象物もなく、機器にも触れないと理解が進まないことも多い。コンピュータソフト一つを取ってみても、マニュアルだけ読んだだけでは使えないことと同じことかもしれない。しかし、理論や概念の指導は必要で、軽視できないので、実技と講義とのバランス、学習段階を考えたカリキュラムの構成が必要である。ともすると、学生の意向を重視しすぎるあまり、実技教育に偏りがちになりやすいので注意したい。

## 考 察

今回調査した結果をまとめると、近い将来、パソコン、専用ワープロ、FAXなどの情報機器を、ほとんどの学生が何か一つは個人で持つようになると思われる。そして、パソコンや専用ワープロの操作や情報処理等の技術や能力はぜひ身に付けたいと思っていることもわかる。しかし、検定や資格に関して言えば、職務独占の資格を一義に考え、ワープロや英語検定などは、これらの能力を身に付けたいと思ひ、できれば認定証も取得できればさらによいと考えている。

パソコンなどの情報機器を個人で持つようになれば、それらが上手に活用できなければ価値は半減する。上手に活用するためには、機器操作だけではなく情報そのものの活用がうまくならなければいけない。情報活用能力とは、情報の収集、取捨選択、加工編集、発信、そして新しい情報を創造することのできる能力である。そして、これら一連の処理を電子情報として活かすことに、読み書きソロバンに加える新しい能力として位置づける意味があり、教育する意義も大きい。

一方、産業界においても大学に対して自立した豊かな情報活用能力の育成を求めている（大学の情報教育に対する産業界からの期待——私情協ジャーナル Vol1 2 No 4/94春）少なくとも、自分自身で情報の処理や判断ができる力を身に付けた学生を企業は求めているのである。

学生自身は、理論や概念ばかりの講義より、実技中心の演習に満足感をもつが、これは、だれでも初めて学ぼうとする場合、基礎だからと言って、実態のわからない抽象概念からスタートしても、興味や関心どころか、嫌悪感さえ抱く。未知な世界に初めて触れる感動と喜びを与えてこそ、学習や研究を深める動機付けになるのである。コンピュータを使いこなすには、基本となるキータイプやマウス操作ができないと始まらない。まごまごしたタイプでは情報活用に至る前に、挫折してしまうかもしれない。導入として、軽快なキータッチに自信をつける意味での検定や認定は達成感も得られ、効果的である。しかし、ワープロは思考ツールであって清書ツールではないので、利用目的をよく理解した上で、深入りを避けたいものである。この後、演習と講義とのバランス、学習段階等を考慮した無理のないカリキュラムの開発が必要である。しかし、情報教育の場合、機器やソフトウェア、操作環境の変化が著しく、特に、最近のOSの移り変わりは激しく、2～3年前の操作環境ですら陳腐化している。今では、キーボードからマウス操作へ変わり、OCRの認識率が飛躍的に向上し、キーボード入力の負担軽減に役立っている。こうした状況から、カリキュラムの固定ができない特異性があり、機器の更新も追いつかないありさまである。どの大学でも、予算の厳しさは同じであるので、古い環境で、新しい教育を考える工夫をも課せられているのである。

## 参 考 文 献

- 1) 関田隆他 特集 大学の情報教育に対する産業界からの期待、私情協ジャーナル、Vol.1. 2・No 4, P2-P25 (1994)
- 2) 坂井利之 戦略的創造のための情報科学、中公新書 (1988)